遠いコスモス

父が死んでから村を逐われるとき、その日までぼくは小学校に通っていた。家から迎えがきて校庭へ出て、しばらく行って振り向くと、花壇いちめんを埋めているコスモスの花が、幼い眼にひどく美しかった。故郷と別れねばならないということが、風にゆれるコスモスの群落のあわいに、髣髴とした予兆となって、ぼくの八歳の眼に映じていたものとみえる。とにかく村を出たのは秋だったということが、コスモス通じてぼくの記憶にある。学校からの戻り道を、ぼくの手を引いてくれたのが、母だったか、使いの者だったか、おぼえていない。

ずっとのちに、ぼくは北辺の戦旅へ出て、汽車が山海間を過ぎるとき、駅のフォームの花壇に、申訳ばかりに咲いているコスモスをみて、はるかにぼくの故郷を、そして幼かった時代を想った。たぶん生きてまた山海間を通りはすまい、という予兆が、そのときも淡く脳裡をかすめた。幼年のときに、人に迎えられ校舎を去ったときに、ぼくはなにかに甘えてでもいるようなおぼろげな快感を覚えていたものだったが、山海関から死地に向うときにも、なぜかまた、未来に甘えかけているような情感を身にもった。死にすら美なる幻想を描こうとした、若年の故であったのだろう。

その戦いも終り、ぼくはひとり東京の片隅で、貧しい生活に耐え、昼は工場の荷造りをし、夜は詩を書いた。秋に一度、疎開したまま、故郷でもなんでもない土地にいる家族の許へ帰ったことがある。市営の住宅で、これ以上小さくは建てられないバラックだったが、その家がすっぽり埋もれるかと思えるほど、軒先はコスモスの花ざかりで、家には母と妹と、一ぴきのきわめてききわけのよい猫が住んでいた。ぼくは母や妹と、単に生つないでいるだけの平穏な食事をとり、語り、眠り、それから猫の頭をなでてやって、また東京へ帰ったが、そのときも淡くせつなく、なにかに甘えている情感のなかで、ぼくはやはりコスモスを優しい美しい花だと思ったのである。なにかしらんこの花の群落の中に醸されている、ぼくの「物語」のいとぐちをみるような気がしたものだから。

もしぼくが、このつぎに、コスモスの群落になにかの意味で眼をみはるときがあるとしたら、それはいくぶんの志を成して故郷へ帰り、あの小学校をみるときか、それとも、ぼくと同じように歩みつかれただれかと、どこかの旅宿の窓によりそって、つつましいたたずまいをみせる野咲きのコスモスを見るときだろう、と思っている。けれども、ぼくはいたずらに老いてゆくばかりで、ぼくのなかから、コスモスの甘美な予兆も消えはじめた。眼をつむり、ぼくはもうひとつだけ自身の上に新しいコスモスをみたいと思ったとき、ふいと、忘れていた風景を想い出した。

——そのとき、ぼくは、痩せて、疲れて、病死するかもしれないという予感のなかで、黄土の山奥の、廃墟の部落の庭に憩んでいた。北辺の軍旅に従った年の最初の討伐のときである。煉瓦の礎石と、雑草ばかりしか残っていない、実に完ぺきな廃墟の、群がる雑草の片隅に、たった一本だけ野咲きのコスモスが咲いていた。どこからこの花の種子は運ばれてきたのだろう？　耳に遠く、山々にこだまして砲声がきこえていたが、コスモスは、ひよわだけれども美しく、風によく自らを支えながら、痛ましく、つつましく、けんめいに小さな虚空を擁いていた。

ぼくはその廃墟のコスモスを、そのときの感傷で、ぼく自身の身の上のように思ったし、そしていまも、荒寥たる人の世の果てで、自身のなかにその一本のコスモスの姿勢をたしかめる。そしてぼくのなかに、ゆれさだまっていく風と、風の中に住む、まだ失われていない秘密な予兆をみる。この廃墟の雑草のなかへ、ひっそりと埋められてゆくにちがいひとつの誠実な情操をみる。そしてぼくの内部で、なお甘美に歌おうとするものの声を聴く。たぶん、ぼくはこの世を生きても、ただむなしい砲声をきいてゆくにすぎないだろう。あの遠い野のコスモスのように、いつも孤独に——壮乎として憂愁に。

伊藤桂一